

啄木のふるさと 盛岡玉山フォトコンテスト ー秋の部ー

受賞作品と講評

厳正な審査の結果、以下の7作品の受賞が決定いたしましたので、ご紹介いたします。
(敬称略)

最優秀賞 審査：岩洞湖まつり実行委員会 ほか

作者：猿橋 由貴子

タイトル：初夏の夕彩（橙）



講評：

最優秀賞には、燃えるような夕焼けと初夏の水田に、岩手山のシルエットのコントラストが生き生きと映える本作品を選出しました。空と水田のいずれにも力があり、更に風や雲の動き全てが揃った名画のような一枚です。

本作品の舞台である門前寺地区は、起伏に富んだ丘陵地を、国営事業により開拓・開田した地域です。地元に住んでいなければなかなか出会えない瞬間を、最高に楽しんで撮影している様子が目に浮かびます。

購入して半年ぐらいと思われるカメラとレンズを非常にうまく使いこなして、郷愁と大胆さが共存するリアリティのある本作品は、盛岡玉山の原風景を見直すきっかけになるポテンシャルを持っており、最優秀賞にふさわしい作品と評価しました。

コスモエコパワー賞 審査：コスモエコパワー株式会社

作者：森田 洋子

タイトル：稲穂色づくあぜ道



講評：

懐かしい風景とビビッドな色調が目を引く作品です。写真独特のパーズで絵を構成したうえで、上手にワイドレンズが使いこなされています。

遠くにはコスモエコパワー株式会社が運営する姫神ウィンドパークの風車群が見えています。黄金色に輝く稲穂に彩られた渋民の原風景とも思える景色の中に、新エネルギーの象徴が共存する様子は、当社のモットーである「事業地域の皆さまとの共存共栄」にも通ずるところを感じました。力強く伸びるあぜ道のように、当社も持続可能な社会の実現に貢献できるよう、しっかりと道を築いていきたいと、創業以来の変わらぬ思いを再認識させてくれる作品でもありました。

岩洞湖まつり賞 審査：岩洞湖まつり実行委員会 ほか

作者：高橋 順吉

タイトル：厳冬の夜明け



講評：

藪川地域のキリリと“凍れる”空気感と、ワカサギ釣りの冬の賑わいが見事に収められています。早朝の岩洞湖に立つテント群。中ではワカサギの釣行を楽しむ人たちが、静かにあたりを待つ様子が目に浮かびます。中判デジタルカメラを使い最高画質で切り取ることで、厳冬の地ならではの凛とした空気感が、作品の細部に至るまで見事に表現されています。広大な風景を収めた繊細な写真は、そのコントラストで見る者を惹きつけます。

外気温は氷点下 20 度近くと思われます。こんなに日に空気を吸い込むと、よく咳き込んだものです。明け方、ひと釣り終えて、テントやドームから出た時に出会う景色。やっと明けてきた薄紅色の空と青白い湖面の世界。本作品は、そんな藪川地域のノスタルジヤがよく表現されています。

審査員特別賞 審査：写真家 杉田賢治

作者：高橋 直人

タイトル：寒暖



講評：

作者はハイライトからシャドーまで、イメージ通りの明るさを表現しています。冬の岩洞湖の厳しさと、プロックスのワカサギ釣り用テントの快適さの対比も面白く、これがタイトルの由縁なのかもしれません。一般的なカメラであればコントラストが強く、岩洞湖とテントの対比は写し込めないのですが、作者はプロ用機材を使用し、最高画質 RAW データで撮影を行い、自身で現像し色を表現しています。この果敢なる挑戦に拍手を送るとともに、これからの作者の作品への期待が止まりません。

高画質のカメラはリアルに写りすぎるので硬い表現になりがちです。時には手描きの絵のような柔らかい表現も試みると、さらに豊かな情景が写し出せると思います。

入選 審査：写真家 杉田賢治 ほか

作者：工藤 貢

タイトル：柿喰うニホンカモシカ



講評：

多くの応募作品において、誰もが手を留め見入ってしまったのがこの作品です。そこには撮影の原点が詰め込まれているからでしょう。思わずシャッターを切ってしまう躍動感や、頭で考えるよりも体が動いてしまう臨場感にこそ、写真の醍醐味はあるはずです。

これまでもカモシカの写真は寄せられましたが、多くはその神秘的な存在を撮ったものでした。それに対して、この写真はどこかユーモラス。予期できない突然の出会いにも拘らず、作者は冷静に構図とカモシカの表情をとらえています。使い慣れた道具で撮影された作品は、画質の粗さはあるものの、写真本来の楽しさを再確認させてくれる一枚です。

作者：阿部 莊

タイトル：ふるさと



講評：

啄木のふるさを象徴する旧渋民尋常小学校を被写体にした応募作品は多くありましたが、雪景色の表現と色調において、本作品は群を抜いています。作者はストロボを強制発光させることで雪の大きさを変えたり、ボケを強調して人間の目で見ることができない建物の表情を演出したりしています。さらに色を消すことで想像の世界を広げるなど、作品は様々な挑戦で仕上がっています。

雪は妖精のようでもあり、見る人を明治時代に誘います。写真を見ていると、思わず啄木がこの校舎に通っていた時代にタイムスリップさせられます。

作者：眞舘 弘治

タイトル：霜化粧



講評：

万華鏡を覗いたような作品は、愛らしい自然の美を教えてください。紅葉した葉を主役に被写体を探しがちになるところを、冬を前に最後の輝きを見せる植物を群生として捉え、生命力が表現されています。私たちの足元にありそうでいて見過ごされている光景を、四隅まできちんとファインダーで見えている作者は、眼前に披露してくれました。こんなふうによつたりとした気持ちで自然に向き合い、四季を感じ取れたらいいなと思わせてくれる作品でした。応募されたプリント作品には、モニターでは表現されない色の深さがあり、見る者の想像力を掻き立ててくれました。

以上